大宮まちづくり新聞

Vol.027
2026年6月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん

Sakura Mohila

今回のご近所さんは、さいたま市大宮区に店を構える「サクラモヒラ」。バングラデシュにあるナラヤンプール村の女性たちに縫製の研修を行い、彼女たちが作った製品を買い上げて日本で販売し、運営をしています。
海外と日本を行き来しながら支援活動を続ける、代表の平間保枝（ひらまやすえ）さんにお話を伺いました。

サクラモヒラ　代表　平間保枝さん

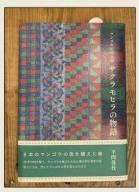
「サクラモヒラ」とは？

バングラデシュにある、ナラヤンプール村のプロジェクトの総称。

「サクラ」は日本の象徴、「モヒラ」はベンガル語で女性を意味します。元駐日バングラデシュ大使、ヘダヤテル・ハク氏によって、2000年に命名されました。

【主な活動内容】
- 村の小学校の増築や教師の雇用。制服やビスケットの支給などの教育支援。
- 村の女性たちへの、マイクロクレジット（無担保での少額融資）による資金運営や、縫製のトレーニングを含めた雇用の援助。
- 現地の会社や工場による、綿や絹とった自然素材を使った商品の生産

幅広い活動やビジネスを長年に渡り続けています。また、それらの売上はサクラモヒラの運営資金として使われています。

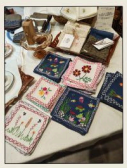


『サクラモヒラの物語』
平間保枝／著
2024年　藤原印刷

独立当初は最貧国と呼ばれていたバングラデシュ。その首都ダッカから遠く離れたナラヤンプール村で三十年ほど前に始まった「サクラモヒラ」プロジェクトの長い道のりを、平間さん自身が体験談を交えて綴っています。現在は続きとなる二巻目を執筆中とのこと。

-Sakura Mohila-
〒330-0846
さいたま市大宮区大門町3-205
ABCビル502号室

TEL：080-5008-0562
定休日：月曜



大学の講師や翻訳の仕事をしていた平間さんですが、サクラモヒラを立ち上げるきっかけがあれば教えてください

始めようと思ったわけじゃないんですよ。昔の、駐日バングラデシュ大使のハクさんという方と仕事で知り合いになったんですね。彼が「自分はせっかく日本の大使になったから、故郷にも何か錦を飾りたい」とバングラデシュに人を誘うんですけど、なかなか続かなくて。その最後に続いたのが私。「暮らしている人を見るのが面白いんだ、あなたのお金は一円も使わせないから来てくれ」って。それで学校を作ってくれと言われた。

そんな経緯でしたけど、行ってみたら嫌とは思わなかったです。貧しかったけれど自然が綺麗で、最初に行った村は礼節があった。まるで本の中に入ったような気がして。そのまま流され流され三十年。今は年に四回ほど行きますけど、いつ行ってもリフレッシュできるような気がします。

これまでの活動の中で大変だったことや嬉しかったことはありますか？

お金をつくることが一番大変でした。みんなの分をひとりでつくるわけだから。でも嫌々って感じではなかったですね。元々能天気で、あまりちゃんとやろうと思ってないから、何の垣根もなかった。

最近になって振り返ってみますと、「これで成果があるんでしょうか」という事ばかりを繰り返してきました。教育もお金もない人を相手にしてやってきてますから。日本とのギャップもありますし、お金は流れるように出ていく。ところが最近、ぱっと村全体のレベルが上がったんですよ。

ナラヤンプール村に最初にできたサクラモヒラショップ（※）がとても繁盛して、村のパイオニア的存在になっています。ああいう風になりたいという人たちが集まってきて店は更に二軒増えましたし、商品を作る方の技術も上がって「女流工芸展ｉｎ埼玉」のようなところで大きな賞をもらうようになりました。小学校も吹けば飛ぶような学校ですけど、近年になってドイツの大学院に留学する子が出てきたりとか。

長い時間をかけるというのは、そんなにバカにしたものじゃないなと思いますね。どうしようどうしようと思いながらやってきたこの三十年が、「ああここまで育ったんだ」という、この何とも言えない充実感。これは深い喜びです。

（※）正式名称は「Sakura Shop」。村の女性たちが2022年に開店。雑貨、日常の食料品の販売に加え、子ども・女性向けの衣類の仕立てを請け負っている。

↑村の女性たちが縫製した衣類や布物。売上は彼女たちの収入として還元され、生活費や子どもの教育費などに充てられる。
制作に携わる女性たちは最初にダッカの研修所で縫製のトレーニングを行うが、色やモチーフといったデザインはほとんどが自作。日本でどういったものが売れやすいのかを考えながら作る。

←女流工芸展用に制作された作品。刺繍はすべて手作業で、羽根の中にはキラキラと光る糸が織り込まれている。

大宮図書館にはビジネスや起業関係の本を集めたコーナーがあるんですが、これから新しいことを始める人たちへアドバイス等あれば。

そんな大それたことは（笑）。

ただ、私は最初チャリティから始めましたけど、ビジネスにして本当に良かったと思ってます。自分も引くに引けなくなるし、だからこそ相手に強く要求できることもあるので、一番いいかなと思います。

チャリティというのはやっぱり、甘さがどちらかに出るから、これで終わりって中途半端で終わることが多いかなと思うんです。とても崇高なような気がするけれど、でも私は、五体満足な人に限っては、やっぱり「働く」ということを教えていくのは、一番正解だったかなと思います。その時は正解なんてわからなかったですけど、振り返ってみたら村の人たちがみんなついてきているし、私はそう思います。

平間さん自身が、これから始めたいことなどはありますか？

ありますよ！　やっぱりこういう自然素材っていうのは、放っておいたら斜陽の運命なので、レベルを上げて芸術品までもっていかないと、絶対残っていかないじゃないですか。だから私は、このきれいなものをきちんとした場所に置いて見てもらえたら嬉しいですし、高い安いとかの値段で決めてしまわない、そういう風な場所に展開できたらなと思います。

サクラモヒラは四月に法人化するんですけど、それはさいたまにあるこの店を活動の中心にしていきたかったんですね。誰でもふらっと来られる場所であり、ここが拠点であることをちゃんと実感しながら、サクラモヒラの活動を日本とバングラデシュだけじゃなく、ヨーロッパを含め世界のあちこちに広めていきたいなって。

平間さんのおすすめ本

ヴィクトリアの時代が好きで、よく関連のものを買ったりしています。だいたい英語の本を読むことが多いんですけど、この本は英語版と日本語版があります。

サクラモヒラでは毎月一回、布の歴史から考えるお話会というものをやっていて、そのために資料を集めています。このお店にあるものはバングラデシュを視点にして、西洋とも繋がってるんです。インターネットで調べる時も、日本とは視点が違うということで、英語のサイトから調べ始めます。お話会に集まる人も、日本じゃない視点が面白くて来てくださるんです。

『英国ヴィクトリア朝のキッチン』
ジェニファー・デイヴィーズ／著
白井義昭／訳
1998年　彩流社

わたしのすきなえほん

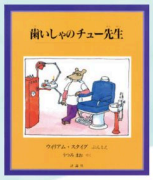
わたしのすきなえほんは、ウィリアム・スタイグの『歯医者のチュー先生』です。

ウィリアム・スタイグは『ロバのシルベスターとまほうのこいし』や、アニメ映画「シュレック」の原作となった『みにくいシュレック』で知られるアメリカの児童文学作家です。ちなみに原作のシュレックは、かなりインパクトが強いので小さなお子さんには注意が必要。

さて、ネズミのチュー先生は腕利きの歯科医です。どんなむし歯もたちまち治してしまうので、特に大きな動物に人気があります。歯科助手の奥さんと協力して、患者の口の中に直接入って上手に治療をしてくれるのです。でも、キケンな動物の治療は決してしません。ネズミですから。

ある日、天敵であるキツネの紳士がほっぺたをぐるぐる巻きにして泣きながらやってきました。チュー先生はもちろん断りますが、あまりにもかわいそうなので奥さんと相談して治療をすることに決めました。ところがこのキツネ、治療の最中にとんでもないことを考え始めるのです。チュー先生と奥さんはこの事態をどう乗り切るのでしょうか……。

ドキドキワクワクするストーリー展開とユーモラスな挿絵は、大人が読んでも十分楽しめます。仕事人(ネズミ)として完璧に仕事をやり遂げようとするチュー先生。表紙のスンッとした立ち姿からは少々プライドが高そうな人格も見受けられます。キツネの紳士のクルクル変わる表情も注目ポイント。そのとぼけた表情にはついクスッと笑ってしまいます。お子さんの歯科デビューにもおすすめの絵本です。



ウィリアム・スタイグ／ぶんとえ
うつみまお／やく
1991年　評論社

名言「ばっかなクマのやつ！」

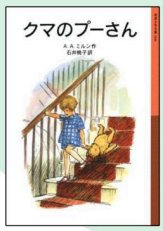
我が家にはたくさんのぬいぐるみがいます。クマ、ネコ、ウサギ、アライグマ……ぬいぐるみたちにお話をさせるのが、小さい頃からとびきり好きなあそびでした。

なかでも、片方の耳にクリスマスの赤いとんがり帽子を被った、やわらかなミルクティー色のからだに、緑色のすべすべの手をしたクマの子は、私のいちばんの仲良しです。

クマのぬいぐるみといえば、世界中で有名なクマのプーさん。とぼけた彼は、クリストファー・ロビンから「ばっかなクマのやつ！」と言われます。

私はこの言葉にはじめて出会ったとき、思いがけない強い響きに驚き、しばらく読み進めることができなくなってしまいました。しかし何度か読み返してみると、粗暴さや意地悪な感情はなく、なんとも愛情のこもった言葉だということがわかるのです。「あぁもう、しょうがないなぁ、なんとも愛おしいやつだなぁ」をこんなに短く表せるなんて。石井桃子さんの日本語訳は、イギリスらしい、上品で甘すぎないかわいらしさを伝えてくれます。

我が家では、私のクマの子がとぼけるたびにこのフレーズを真似して言うのがお決まりになっています。もちろん、クリストファー・ロビンと同じように、愛情をこめて。クマの子はよくわからない顔をしたり「まぁ！」と言ったりします。その愛らしい様子に、私も家族も笑顔になるのです。



A. A. ミルン／作
石井桃子／訳
2000年　岩波書店

大宮読書バトン　第11回【窓】

あなたが旅に出る目的はなんですか？　美しい景色？　有名な建築？　その場所ならではの食べ物？　いろいろありますよね。〝彼〟の場合、旅すること自体が目的であるように思えます。どんなところでも軽々とでかけ、ぶらぶらと街を歩き、言葉も通じないのにすぐにその場所に溶け込んでいきます。世界につまらない場所なんてない、誰かがいて何かがある、そんな思いで旅を続け、心が動かされた時、カメラのシャッターをきります。

今回紹介するのは、そんな〝彼〟――沢木耕太郎の『心の窓』です。バトンのテーマが「窓」ということなので、直球ではありますが、タイトルに「窓」が入っているこの本を紹介します。

これはフォトエッセイ『旅の窓』の続編です。どちらも同じ構成で、本を開くと左側に一枚の写真、右側にその写真を撮った時の状況や写真から立ち上がる物語が書かれています。時代も場所も無秩序に並んでいるので、どのページから読んでも楽しめます。今は世界中様々な場所の映像を気軽に見ることができますが、一瞬を切り取った写真だけが伝えられることもあることに気づかされます。

『深夜特急』時代のような荒々しさやハラハラ感はないけれど、この人らしい好奇心があふれています。家の本棚を漁って、『深夜特急』読み返してみよ！

紹介した本
『心の窓』
沢木耕太郎／著
2024年　幻冬舎

紹介者　みかん

大宮図書館移転開館７周年によせて

新しい知識や探していることが、図書館に来ればきっと見つかる。
いつでも開いていて、気軽に立ち寄れる安心感がある。
勉強のモチベーションも自然と高まり、同じ空間でそれぞれに取り組む人たちの姿にも励まされる。
館内をゆっくりブラウジングして、普段は手に取らない本との思いがけない出会いを楽しみたい。
参加したイベントやワークショップをきっかけに新たな興味が広がる。
図書館を自分の書斎のように感じられたとき、きっと一生楽しめる場所になるという実感。
「この図書館が近くにあってよかった」と思えること。
そして帰るとき、「きょうはなんとなく良い時間の使い方をしたかもしれない」とほのかな充実感が残ること。
訪れる人に、そんなふうに感じ続けてもらえる場所でありたい。
７年経っても、また時が流れても大宮図書館はいつもフレッシュで、新たな出会いを想像できて、何度来ても飽きないお気に入りのスポットであり続けたいと思っています。

大宮図書館　館長

Xではイベントやスタディコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々お伝えしています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

大宮図書館
ホームページ

大宮図書館
X

この刊行物の書影画像は出版社からの提供、TRCMARC、BOOKデータASPから引用しています。

大西民子の一首

空間を一直線にわれに来る
向日葵（ひまわり）の黄とその芯の黒

『雲の地図』より

どこかの庭先で見つけたのでしょうか。黄色と黒のコントラストが鮮やかな向日葵が目に飛び込んできました。「空間を一直線にわれに来る」と感じたのは、向日葵が放つ強い生命力に圧倒されたからなのでしょう。

ゆかりの文学コーナー

『さいたまって面白過ぎる！』

『大学的　埼玉ガイド―こだわりの歩き方―』
ものつくり大学教養教育センター／編
井坂泰志／責任編集
2024年12月　昭和堂

数多ある地域資料の中から、今回はこちらの一冊をご案内します。

『埼玉学』と銘打ち、埼玉県を様々な視点から多角的に紹介した本です。歴史・文化・自然などの魅力や発見が、この一冊にギュッとつめこまれているので、自分の興味や関心のあるところから読み始めることもできます。そして、扱っている範囲がとても広いのがこの本の良いところ。目次からいくつか挙げてみます。「見沼田んぼ―原風景」「風土が育てた文学者・石井桃子」（さいたま市緑区の三室の話が出てきます）。

そして「県民性からみた埼玉県」。この章に引用されているドラッガーの言葉が印象的です。

「強みとは持ち主自身によって知られていない」。……さいたまの魅力はさいたまの人に自覚されていない、ということです。

関西出身でさいたまに転居してきた私から見れば、武蔵野うどんはもっと誇ってもいいと思います。初めてつけ汁うどんをいただいた時には、あまりの美味しさに仰天したものです。うどんといえばかけうどんと思い込んでいましたが、豚肉を使った濃いめのつけ汁にひたす食べ方があったとは！　関西では、つけ麺タイプのうどんが珍しいので驚きました。また豚肉の美味しいこと！

埼玉の豚肉生産についてはサイボクという会社を紹介した「埼玉の産業集積」の章（P124）に記述があります。サツマイモと麦の一大生産地だった埼玉。サツマイモが優れた養豚技術を育み、麦の文化がコシの強いうどんを生んだのですね。先人の歩みに感謝しつつうどんをすすります。ずるずる。ああ美味しい。

どこから読み始めても面白い本ですが、これを読んで実際に現地を歩いてみたくなった方は、参考資料の二冊や各区の「ガイドマップ」もぜひどうぞ。

『埼玉凸凹地図　スリバチの達人』
2022年7月　昭文社
『新埼玉さわやか散歩　41コース』
2000年3月　山と渓谷社